
黄泉還る者に華の芳を

すーじー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉還る者に華の芳を

【Nコード】

N7011Y

【作者名】

すーじー

【あらすじ】

魔女シリーズ。重複投稿。

(前書き)

昔のやつ2 .

端的に言つと、ぼくの目は半分死んでいる。

話を始める前に、やってもらいたいことがある。ぼくがこれからする話と感覚をよく理解してもらいたいからだ。そのために協力してほしい。

まず、鼻先に 目から十センチくらい放したところに、人差し指を立ててほしい。何本立ててくなくても構わないけど、きつと大抵の人は二本が限界だろうと思う。人差し指の用意ができれば、次は遠くの景色に焦点を合わせてみよう。テレビでもベッドでもなんでもいい、とにかく『指の向こう側』の何かを見てもらいたい。するとどうだろう。一本か二本かの人差し指が、『すかすか』に見えるんだらうか？ 指が半透明になって、『向こう側』がうかがえるはずだ。何故こういうことが起こるとかの説明は必要ないから省かせてもらうけど、この『すかすか』感はわかってもらえたと思う。

ぼくの目は半分死んでいる。この世のありとあらゆる生き物が、『すかすか』に見えるのだ。

いつからこんなことになったかは、つまびらかに覚えていない。ぼくまだ幼い頃、賢いと評判の魔女に魔法をかけられてしまった経験があるから、それが原因でこうなってしまったのだ、と推測している。在りし日以来、ぼくの目に生きている物がはつきりと像を結んだことはない。想像してみるといい、寝食を共にする親も、横を通り過ぎていく赤の他人も、わけへだてなく、猫も、鳥も、花だって、ガラスみたいに中身のない『すかすか』に見える風景を。思い浮かべてみて、きつといい気分にはなれなかつただらう。だけどぼくは何年間も、その気味の悪い世界の中で生活してきた。

手塚治虫の『火の鳥』に、ぼくとよく似た境遇の青年が出てくる。もつとも、その青年の場合は、生物がみにくい無機物に見えるというもので、『すかすか』とは少し違っている。ぼくと彼の立場が逆

転し、動植物が『すかすか』ではなく、土くれやガラクタに変わってしまつたら ぼくは発狂してしまう。どちらの方が不幸だ、なんて優劣は個人の価値観が付けるものだけど、ぼくからすればマシな方だつたな、と思う。文字通り形骸化した有機物しかない世界では、諦念しか生まれないからだ。まだ自我を保つてられる。ただちよつとだけ、目に映るものと同じように、自分自身の心が『すかすか』になつただけだ。それはあんまり、おかしいことではない。そういう理由で、昔から他者との人間関係を必要以上に深めたこととはない。ぼくにとって、地球上の生き物はあまねく差別せず『すかすか』で十把一絡げにできるためだ。自分とは全然違う、異質の何か。そう割り切っている。誰が相手だろうと事務的に機械的に受け答えをするのみ 親さえも、ぼくを醒めた人間だと評価した。まあ、無理もない話だ。

そんなだから、一学期中間考査の日程が終了した日の午後、クラスの子と遊びに出掛けることはなく、ぼくは校舎内で暇をもてあましていた。

放課後の学校というのは、非常に快適な環境だ。あまり『すかすか』がない。よしんばいたとしても、そんなに近くにすることは珍しい。普段の学校には『すかすか』が多すぎるから、相対的に少なく感じているだけかもしれない。でも、錯覚なら錯覚で構わない。どうせ元々、見えているものが錯覚みたいなものなのだ。

今日もそんな、錯覚がない錯覚の中をそぞろ歩いてみた。無意味に一階から最上階までを往復したり、廊下を端から端まで歩いてみたりする。時折、何とはなしに教室を覗いてみたりする。ある教室で、つんとする花の香りがした。ぼくは目を見開いた。

女の子が座っていた。『向こう側』が見えなかった。なんだ、これは。

「キミ、帰らないの？」

気がつくとぼくは、戸口から話しかけていた。たぶん、自主的に他人に声をかけたのは初めてだ。自分の行動にいささかの驚きを覚

えた。

女の子が顔を上げる。すごい、と思った。「すかすか」じゃない。「えっと、その、雨宿りをしているので、雨が止むまでは……」

今日は朝方から雨が降っていた。じつとりと肌にまとわりつくような、小降りのイヤな雨だ。ぼくが学校に留まっていることにも、わずかながら荷担している。

「ふうん。傘貸そうか？」

言いながら、ぼくは教室の敷居をまたいだ。甘ったるい香りがかうそう強くなる。

「いえ、結構、です……」

芳香に脳髓が痺れてくる。酩酊感に近かった。まるで媚薬だ。

ぼくが女の子の方に向かって歩き出すと、彼女は困ったような顔をした。「向こう側」がうかがえない表情を見たのも、しばらくぶりだ。その顔に浮かぶ感情がなんであれ、ぼくにとっては喜ばしい。「あの……あまりわたしには関わらない方がいいと思います」

彼女が一言一言喋るたびに匂いが深くなり、ちりちりと神経が焦がされる。あまりの恍惚に、どうして？ と尋ねた自分の声すら遠くに聞こえた。だけど、彼女の答えでぼくは我に返った。

「実はわたし、もう死んでいて……ゾンビなんです」

軽いジョークだと思った。でも、ひどく納得できる。この子は既に死んでいるから、「向こう側」が見えないのだ。「すかすか」じゃない。生きていない。そういうことならば、この香気はきつと腐敗臭なのだ。だから、官能的に感じられる。

本来ならば女の子は、数日前に起こった事故で家族もろとも死んでいたはずだった。だけど魔女が、彼女は善人だから死なせるには惜しい、と言って彼女を生き返らせたのだそうだ。しかしそれには一っただけ条件が付いていた。一週間以内に、誰かを殺して身体を乗っ取ること。期限が過ぎると、元々の彼女の肉体は朽ち果ててしまつらしい。一週間で、魔法の効果が持続する期間なのだ。そして 明日が蘇生してから七日目にあたる。彼女は善人だから、自

分が生き延びる為に他者を犠牲にすることがためらわれ、六日間を棒に振ってしまった。このままでは、まもなく彼女は二度目の死を迎えることになる。実質的な死だ。

頼まれたわけじゃなかったけど、応酬のように、ぼくは今まで誰にも教えたことのなかった己のことを語った。幼少時、魔女に魔法をかけられたこと。生命が『すかすか』としてでしか認識できないこと。死んでいる彼女だけは『すかすか』ではないこと。彼女なら理解してくれると思ったから、すべてを打ち明けた。ぼくの恣意な思いこみかもしれないけど、彼女とぼくは 同じ人種のような気がしたのだ。

ぼくの話が終わると、彼女は済まなさそうな顔をした。

「……それでもやっぱり、ダメだと思います。わたしは明日の朝には、本当の死体に戻ってしまうから……」

「じゃあ、何か……何かぼくに、できることはない？」

彼女に拒絶されたのに、ぼくの態度はしつこいものだっただろう。自覚はある。だけど、せつかく『すかすか』でない他人に出会えたというのに、明日には彼女はいなくなってしまうなんて、ぼくにはたえられない。ほとんど無意識に、そんなことを口にしていった。

「それでは あなたの身体をいただける？」

女の子はぼくを真っ直ぐに見据えて、そう言った。その眼差しは真剣そのもので、とてもじゃないが 善人とは思えない。

「悪いけど……なまじ生死の区別が付く分、死ぬのは怖いよ」

ぼくが首を横に振ると、彼女は初めて自分が発した言葉を把握したかのように、あわてて撤回した。

「あっ、すみません、忘れてください。おかしいですよ、初めてあった人にこんなこと頼むなんて……ちょっと、どうかしました。何てこと言ったんだろう、わたし……」

女の子の目尻から、不純物で濁った涙が流れた。本音を言えば、彼女だって生を渴望しているのだろう。でなければ、あんなに苦そ

うな涙を流したりはしない。

ほんとうは今日はもう、帰らないんです、と彼女は静かに呟いた。身体の中身が相当痛んできているらしい。風前の灯火なのだ。その腐食の進行具合は、むせ返るほど濃厚になった花の臭気からも推し量れる。濃い匂いは、麻薬のように神経に浸透していく。

彼女に残された時間が少ないのを悟ったときには、ぼくは行動に移っていた。このままではいけない。ぼくにとって、彼女は唯一の光だ。どうあっても見失いたくはない、見失うわけにはいかない。最早ぼくは、彼女のためでなく、ぼく自身のために動いていた。

時計の長身と短針が十二で重なる頃に、ぼくは学校に忍び込むことにした。雨は相変わらず降っている。手足に絡みつくような、鬱陶しい雨だ。背負った荷物が重いのも手伝って、自然と顔をしかめていた。校舎には、窓ガラスを割って侵入した。手段を選んではいられない。入ってすぐに気づいたのだけど、真夜中の学校はとても快適だ。『すかすか』がまったく存在しない。広い世界に、ひとりぼっちにされたような感じがする。元来の世界に帰ってきたような、そんな心地良い幻覚だ。

あの子は昼と同じ教室にいた。同じ椅子に座って、死んだように眠っていた。ぼくが部屋の電灯を付けても、目を開けることはなかった。でもまだ、二度目の死に至ってはいない。微かな微かな、虫の息のような寝息を立てている。彼女がまだ『生きています』かといって、暇があるわけではない。ぼくは急いで作業に取りかかった。事が済むと、ぼくは彼女を揺すり起こした。覚醒した彼女は、ぼくを認めるなり鳩が豆鉄砲を食ったような表情を作った。

「おはよう。といってもまだ夜だけど。気分はどうだい？」
安心させるつもりで、気さくに声をかけた。しかし、彼女の驚愕が困惑に変化しただけだった。

「えっと、すごく調子がいいです……その、生まれ変わったみたい……でも」

彼女の華奢な手が、ぼくの二の腕を掴んだ。まるで存在を確かめ

るように触れ、撫で回してくる。気色が悪い。

「でも、どうして……あなたが『すかすか』に見えてしまうんですか？」

「生きているのに透けていない彼女の腕を、無下に振り払う。」

「当然、それがぼくの目だからさ。取っ替えさせてもらったんだよ。これくらいの役得は、もらってもかまわないだろう？」

「そ、そんな……」

彼女の抗議に背を向けて、ぼくは帰り支度を始めた。すえた悪臭が鼻をつく。吐き気がする。早く帰ろう。

「いや、キミには感謝しているよ。何せ、ぼくにとってキミは希望の光だったからね」

そう、彼女がいたからこそ、ぼくは決心し、実行することができたのだ。

「魔女を殺すことを。」

「さようなら、第二の人生が快適なものであることを願うよ」
ぼくは、魔女の姿となった彼女にお別れを言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7011y/>

黄泉還る者に華の芳を

2011年11月21日03時21分発行